6例, local G. N. 3例, generalized G. N. 12例であったが, 成人においては minimal change は1例のみで他は全て generalized G. N であった。

血清 IgA 値は IgA (+) 者に高いものがあり, IgA (−) 者に比べて高い傾向があったが, 小児と成人では差は認められなかった。

血清 IgG, IgM, β_1c 値は IgA (+) と IgA (−) 群で差はなく小児と成人間にも差はなかった。

以上 IgA (+) を小児と成人について比べると成人では血尿の他に蛋白尿を伴うものが多く, 光顕による組織変化も小児より成人が強い傾向がみられた。IgA 沈着率も成人の方がやゝ高く, かつ成人は IgA 単独より IgA, β_1c を伴うものが多かった。このことから免疫反応は年令と共に進み, 組織変化も進行している印象を得た。

IV. 無症候性血尿, 蛋白尿の長期予後 (52. 2. 15)

我々は, 偶然発見された血尿および蛋白尿の中で, 臨床的, または組織学的に診断のついたものを除外した原因不明の血尿または, 蛋白尿の経過を観察してきた。今回これらのものから5年以上の長期に渉っての経過をみられた48例について, その予後, 並びに予後に関する2〜3の因子について検討した。

症例は, 血尿群33例, 蛋白尿群6例, 血尿+蛋白尿群9例で, 観察期間は5年〜14年, 平均7年2ヵ月であった。

尿所見の推移は, 3例の著明な改善を含めて, 尿所見の消失を認めたもの27例 (56.3%) この中血尿群では20例 (60.6%) 蛋白尿群2例 (33.3%) 血尿+蛋白尿群5例 (55.6%) であり, 血尿群と蛋白尿群に差を認めなかった。

腎生検を行ったものは, 32例 (66.6%) であり, その組織所見は, Essentially nomal (EN) 8例, Minimal change (M. C) 12例, Focal proliferative G. N. (F. D.) 6例, Generalized proliferative. G. N. (G. P.) 6例であった。組織所見と予後の関係をみると, E. N, M. C, F. P. の各群とも治癒率は50%であったが, G. P. は16.7%で前三者より悪かった。

扁桃肥大及び扁摘の有無と予後との関係をみると, 扁桃肥大のあったものは48例中22例 (45.9%) でそのうち扁摘を行ったものは16例である。扁摘後治癒したものは16例中8例 (50.0%), 扁摘をしなかったものの治癒率は6例中3例 (50.0%), 扁桃肥大のなかったものの治癒率は26例中13例 (50.0%) であり, 何れの間にも差がなかった。

治療による明らかな効果を認められたものは副腎皮質ホルモン, 免疫抑制剤を用いた2例のみであった。

経過観察中明らかな尿所見の悪化をみたものは2例で何れも血尿群で minimal change の組織所見をもったものであったことは注目に値する。

小児腎疾患の臨床的研究

国立療養所西札幌病院　門　脇　純　一

I. 目　　的

小児期のネフローゼ症候群 (「ネ」症) に Cyclophosphamide (CPA) を使用して8年を経過した。本剤は副腎皮質ステロイド剤 (ス剤) 感受性の Frequent Relapser (F. R.) の寛解延長効果を持っていると一般に認められている。一方, 本剤の副作用については未知の領域があり, 本症が悪性腫瘍などと予後が異なる点から使用にあたっては慎重なことが要望されている。この時にあたり薬効につき報告することは本剤の小児期「ネ」症治療における役割, 評価をするうえでの一資料となると考えた。

II. 対 象。 方 法。

1968年以降, 国立西札幌病院に入院した腎疾患は322例でうちネ症は59%の189例であった。治療と教育が同時にできるだけに病歴の長い, 治療に困難を覚える症例の集積がありCPAによる免疫抑制療法にふみきる症例が多く, 現在まで70例近くになっている。上記期間中に入院した「ネ」症の一部で, しかも近接効果判定以外の

症例は長期に追跡できたもので，ス剤の重篤な副作用のため継続使用が不可能であったり，ス剤により経過がうまくコントロールできないもの，ス剤抵抗性の症例が対象となった。CPA は体重 kg あたり 1.4 mg/日，平均 2.2 mg/日， 使用期間は平均2ヵ月で中等または少量のス剤を併用した。

III. 成　　績

ス剤感受性 F.R. の長期追跡したものは図1に示した通りであった。対象42症例中，約17%の症例は6ヵ月以内に再発し，寛解の延長効果のなかった症例である。更に治療完了後1年では33%， 2年では43%， 3年では52%の症例が再発した。

再発症例につき CPA 治療完了後，何時頃再発するかを検討したのが図2である。5年までの観察で60%近くの症例が1年以内に，92%が3年以内に再発している。3年以降の再発は僅か2例で5年以後の再発はみていない。

この群につき，1年以内に再発した症例群と3年以上寛解を継続している症例群，各13例につき CPA 使用量，使用期間発症年齢，治療開始時年齢につき検討したのが表1である。使用量には両群で差がないが，使用期間には差があった。発症年齢，治療開始時年齢には両群に有意差があり，年長症例に CPA の有効と考えられる症例が多いという成績となった。

近接効果からみて CPA 治療が無効であった「ネ」症は11例で，全て腎炎型で，検索し得た組織像は diffuse proliferative glomerulonephritis, membranoproliferative glomerulonephritis であった。これら症例をス剤の感受性からみると，ス剤抵抗性3例，ス剤感受性なが

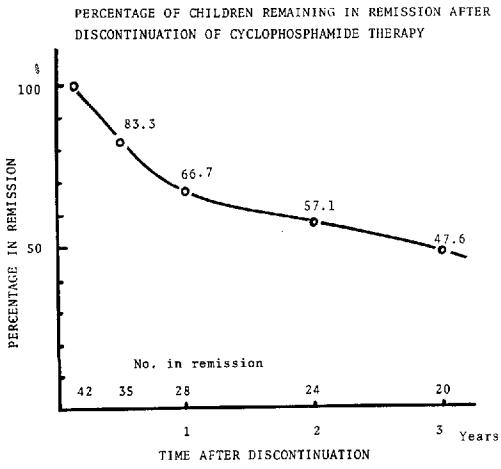

図 1

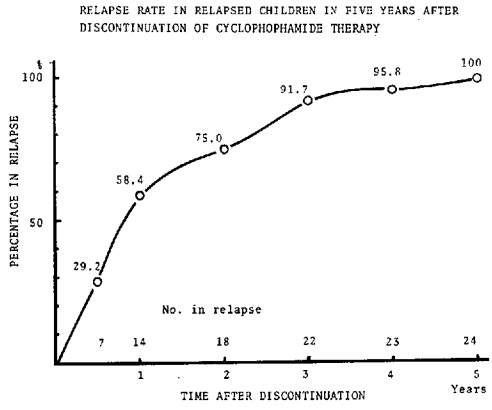

図 2

表 1 Comparison of the AGE with disaese onset and start of cyclophophamide therapy in two groups: 1)Early relapsed, and 2) Long remaining in remission

	Case No.	Duration of therapy. day (range)	Dosage mg/kg b. w. (range)	Age: Mean+ISD (mos)	
				Disease onset	Start threapy
Group 1. Cases relapsed within 1 year	13	84.1 (48—155)	2.2 (1.5—3.5)	5 y 6 m±27.4*	8 y 10 m±17.9*
Group 2. Cases remaining in remission more than 3 years	13	64.5 (28—107)	2.2 (1.4—2.9)	9 y 3 m±45.94*	12 y 5 m±31.04**

* V=0.0067>X 0.01=2.58
** V=4.3963>X 0.01=2.58

ら不完全寛解Ⅰ型4例，Ⅱ型4例となった。ス剤抵抗性の3例は全例，腎不全に進行し血液透析療法を行ない，うち1例は頭蓋内出血と推定される原因で死亡した。

IV. 考察・まとめ

考察まとめ長期追跡調査をした対象症例はF.R.であったので，6カ月以上を寛解延長効果があったとすると，60%以上がこれにあたり今迄の報告が確認されたことになる。治療完了後3年の時点での寛解症例は半数以下となっている。再発症例を治療後の時間的な観点から検討すると3年までに90%強の症例が再発しており，3年を過ぎると激減しており現段階では5年以後の再発をみていない。治療後3年が要注意期間とみたい。

更に興味のあることはCPAは発症年齢と治療開始時年齢が多い群に寛解延長効果のみられたことである。この傾向はBarratらの報告でも指摘されているが，もしこれが一般的な傾向であるとすれば，本剤による治療適応症例選択の指標となると考えられている。

経時的生検例による病理学的検討

分担研究者　飯　高　和　成

研究協力者　五　月　女　茂　　石　飛　文　雄
手　塚　司　朗

独協医科大学　第二病理

糸球体症変の病型，terminologyなどについて必ずしも統一的見解は得られて居らず，またネフローゼ症候群（ネ症）の糸球体症変についても経時的追跡による病像の推移，疾患概念の独立性に対する疑義境界領域に位すると考へられる疾患などの問題も提起されて居る。

第一に膜性腎症の経時的生検例より形態学的検討を行い，第二に微小変化と巣状糸球体症変を取り上げた。

生検材料による組織診断，病型分類が臨床上の予後ないし治療効果の判定に極めて有力なきめてであるが，糸球体数の限定された生検材料より微小変化あるいは巣状糸球体症変を組織学的に，適確に診断することは困難であり，さらに電顕ないし免疫組織学的検索を進める上で慎重になされなければならず，これら各々の疾患の独立性，病因，症理発生などについて数多くの未解沢の問題が残されていると考へられるからである。

I. 膜性腎症の臨床的事項

本症生検材料23例のうち経時的生検例は例である。ネフローゼ症候群を呈した本症の年令は4才より64才に亙り，10才以下2，20代2，30代7，40才8例であり，平均年令は38.1才。男女比は13：8とやゝ男性に多い。

臨床診断は特発性ネフローゼないしリポイドネフローゼと診断されたもの12例，糸球体腎炎5例，膜性腎症2例，腎静脈血栓症および偶発性蛋白尿各1例である。初発症状あるいは発症時理学的所見は下肢その他の浮腫14例，高血圧5例，蛋白尿2例，関節症状1例である。発症より生検に至る期間は平均2年6ヶ月で多くは1～2年後の生検である。

臨床検査成績上，血圧の平均 140/87 mmHg であるが，20例中収縮期圧 150 mmHg 以上12例，拡張期圧 95 mmHg 以上6例である。血尿は18例中高度顕微鏡的血尿2例10～20/1視野5例，1～10/1視野9例，陰性2例，蛋白一日排泄量19例平均7.88/1日，BUN 19例平均 24.5 mg/dl クレアチニン16例平均 1.8 mg/dl 血清総蛋白量17例平均 4.9 g/dl コレステロール20例平均488.8 mg/dl の結果であった。

II. 膜性腎症の経時的病像の推移

7例の経時的生検例の追跡の結果，病像に変化のみられなかった症例および軽快例各1例であり，他の5例は程度の差はあるが進行例と考へられた。

不変例は，S.U. 4才女性（m-679，m-772）の症例発症後約4ヶ月 focal segmental proliferation を伴った膜性腎症の所見であり，約1年後尿蛋白は持続性増加の傾向にあったが，再生検所見に顕著な差を認めなかった。

軽快例は D.H. 31才女性（m-42，m-190）：発症後

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Ⅰ.目的

小児期のネフローゼ症候群(「ネ」症)に Cyclophosphamide(CPA)を使用して 8 年を経過した。本剤は副腎皮質ステロイド剤(ス剤)感受性の Frequent Relapser(F.R.)の寛解延長効果を持っていると一般に認められている。一方,本剤の副作用については未知の領域があり,本症が悪性腫瘍などと予後が異なる点から使用にあたっては慎重なことが要望されている。この時にあたり薬効につき報告することは本剤の小児期「ネ」症治療における役割,評価をするうえでの一資料となると考えた。